

平21
中
国
1
3

〔注意〕

答えはすべて、解答题の定められたところに記入しなさい。  
本文には、問題作成のための省略や表記の変更があります。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これまでは、自分が実際に歩んできた道のりを書いてきました。こうして振り返ってみると、たしかに多くの人が行かないような場所や、体験しえないような行為をしてきたのかもしれないかもしれません。このような経験によって、ぼくは世間から「冒険家」などと呼ばれることもあります。

しかし、辺境の地へ行くことや危険を冒して旅することが、果たして本当の冒険なのでしょうか？ そもそも「冒険」や「旅」には、いったいどんな意味があるのでしょうか？

① 観光旅行に行くことと旅に出ることは違います。観光旅行はガイドブックで紹介された場所や多くの人が何度も見聞きした場所を訪ねることです。そこでは実際に見たり触れたりする喜びはあるかもしれませんが、あらかじめ知り得ていた情報を大きく逸脱することはありません。一方、旅に出るといのは、未知の場所に足を踏み入れることです。知ってある範囲を超えて、勇気を持って新しい場所へ向かうことです。それは、肉体的、空間的な意味あいだけでなく、精神的な部分も含まれます。むしろ、精神的な意味あいのほうが強いといってもいいでしょう。

人を好きになることや新しい友だちを作ること、はじめて一人暮らしをしたり、会社を立ち上げたり、いつもと違う道を通って家に帰ることだって旅の一部だと思えます。実際に見知らぬ土地を歩いてみるとわかりますが、旅先では孤独を感じたり、不安や心配がつきまといまいます。旅人は常に少数派で、異邦人で、自分の世界と他者の世界の間にあって、さまざまな状況で問いをつきつけられることになります。多かれ少なかれ、世界中のすべての人は旅をしてきたといえるし、生きるとはすなわちそういった冒険の連続ではないでしょうか。

生まれたばかりの子どもにとって、世界は異質なものに溢れています。もともと知り得ていたものなど何もないので、あるがままの世界が発する声にただ耳を澄ますしかありません。目の前に覆いかぶさってくる光の洪水に身をまかせられないのです。そういった意味で、② 子どもたちは究極の旅人であり冒険者だといえるでしょう。歳をとりながら、さまざまなものとの出会いを繰り返すことによって、人は世界と親しくなっていくます。やがて、③ 世界の声は消え、光の洪水は無色透明の空気みたいになって、何も感じなくなっていくでしょう。それは決して苦しいことではありませんから、世界との出会いを求めることもなくなり、異質なものを避けて五感を閉じていくのかもしれないかもしれません。そうして世界がすでに自分の知っている世界になってしまったとき、あるがままの無限の世界は姿を変えて、ひどく小さなものになってしまいます。そのことを否定するつもりはまったくありませんし、自分もそうならないとは限りませんが、不断の冒険によって④ 最後の最後まで旅を続けようと努力したいと僕は思うのです。

現実は何を体験するか、どこに行くかということとはさして重要なことではないのです。心を揺さぶる何かに向かいあっているか、ということがもっとも大切なことだとぼくは思います。だから、人によっては、あえていまここにある現実を踏みとどまりながら大きな旅に出る人もいます。ここではない別の場所に身を投げ出すことによってはじめて旅の実感を得る人もいます。

ぼくが冒険家という肩書きに違和感を抱く理由がわかっていただけでしょうか。いま生きているという冒険を行っている多くの人々を前にしながら、登山や川下りや航海をしただけで「すごい冒険だ」などと到底思えないのです。

(石川直樹『いま生きているという冒険』による)

注

○逸脱する⇨外れる。

○異邦人⇨外国人。異国人。

○不断の⇨絶え間ない。



平 2 1
中
国
—
3
—
3

三 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

月のひかり 金子みすゞ

一

1 月のひかりはお屋根から、  
2 明るい街をのぞきます。

3 なにも知らない人たちは、  
4 ひるまのように、たのしげに、  
5 明るい街を歩きます。

6 月のひかりはそれを見て、  
7 そつとためいきついてから、  
8 誰も貰わぬ、たくさんの、  
9 影を瓦にすててます。

10 それも知らない人たちは、  
11 あかりの川のまちすじを、  
12 魚のように、とおります。

13 ひと足ごとに、濃く、うすく、  
14 伸びてはちぢむ、気まぐれな、  
15 電燈のかけを曳きながら。

二

16 月のひかりはみつけます、  
17 暗いさみしい裏町を。

18 いそいでさつと飛び込んで、  
19 そのまじしいみなし児が、  
20 おどろいて眼をあげたとき、  
21 その眼のなかへもはいります。

22 ちつとも痛くないように、  
23 そして、そこの破ら屋が、  
24 銀の、御殿にみえるよに。

25 子どもはやがてねむっても、  
26 月のひかりは夜あけまで、  
27 しずかにそこに佇っています。

28 こわれ荷ぐるま、やぶれ傘、  
29 一本はえた草にまで、  
30 かわらぬ影をやりながら。

注 ○「みすゞ」は「みすず」と読む。

○影は月の光。

○佇はたまたずんで。

問一 第7行、第9行「そつとためいきついてから、／誰も貰わぬ、たくさんの、／影を瓦にすててます。」について、  
(1)「影を瓦にすててます」とは、どのような情景ですか。  
(2)なぜ「ためいき」をついているのですか。

問二 第13行・第14行「ひと足ごとに、濃く、うすく、／伸びてはちぢむ」とは、どのような情景ですか。

問三 第18行「いそいでさつと飛び込んで」とありますが、なぜそうしたのですか。

問四 第28行・第29行「こわれ荷ぐるま、やぶれ傘、／一本はえた草」とありますが、これらはどのような存在として表現されていますか。

問五 第25行、第30行において、「月のひかり」はどのような存在として表現されていますか。

